

ミニレポート vol.5 6

小中学生の学力低下と教育格差



ウチヌノ人事戦略事務所 社会保険労務士 内布 誠

小中学生の学力低下と教育格差

◆「全国学力テスト」の実施結果

文部科学省が、小学6年生と中学3年生の原則全員を対象に、昨年に引き続き4月に実施した「全国学力・学習状況調査」（全国学力テスト）。これは、全国的な義務教育の機会均等と、その水準の維持向上を目的として実施されています。

この度、その結果が公表されました。今、小中学生の教育はどのような課題を抱えているのでしょうか。

◆応用力に課題あり

全国学力テストでは、国語と算数／数学について、基礎知識を問う「A問題」と、応用力を測る「B問題」が出題されています。平均正答率は、A問題で60～70%台、B問題では50～60%台と、昨年に比べ約8～16ポイント低下しました。科目別で平均正答率が最も高かったのは中学3年の「国語A問題」の74.1%、最も低かったのは中学3年の「数学B問題」の50.0%でした。正答率は全科目で昨年より下がっています。

「B問題」の正答率の落込みから、応用力に課題があることがみてとれます。文部科学省では、「正答率の経年比較はできないが、今回は問題がやや難しかったために下がった」と説明しており、「知識を活用する力に

課題があるほか、知識の定着にも一部課題がある」としています。

◆地域別学力格差／公・私立間格差の存在

公立校のみ、都道府県別の正答率も集計されています。最も差が開いた「数学A問題」では、最も高い福井県の72.1%に対し、最も低い沖縄県では49.6%にとどまっており、学力格差が懸念されます。

また、昨年上位だった県は、今回も高い正答率を記録しました。その反面、昨年下位だった県では今回も正答率が低く、多くの都道府県の成績が前回と同様の傾向を示したことから、「学力格差の固定化」を指摘する声も出ています。下位の地域の中には、テストと同時に実施したアンケートで、学習意欲の低さや生活の乱れが明らかになった都道府県もあり、今後の取組みが注目されます。

また、国私立校は国語、算数／数学とも「A問題」で8割前後、「B問題」で6～8割の正答率となり、いずれも公立校の平均を大幅に上回る結果となりました。

◆調査結果を生かして今後の教育の充実を

今回のテストには、小学校の99.4%、中学校の96.4%が参加し、計約223万8,000人が受けました。この膨大なデータを積極的に公開・活用していくことが望まれます。この調査結果を今後の教育の充実にい

かに活かしていけるかが、何より重要なテーマとなります。